

Zero Sum Short Stories  
零和短編集

02

# 真劍裸勝負



濠門長恭

# 目次

一	色恋無用	二
二	強辱夢想	九
三	一本勝負	一二
四	身劍伝授	一八
五	雪辱左封	二七
六	変幻二刀	二九
七	一日一死	三六
	後書き	四五

一 色恋無用

「帯にはさんでいる懐剣は、素直に抜くと逆手になります」

男の帯は腰に巻くのに対して女は胸元に巻く。そこに立てて差している懐剣は、刀よりもずっと高い位置に柄がくるといふ意味だ。

直女なおめは懐剣袋の紐をほどいて瞬息に懐剣を引き抜き、腕を曲げて目の高さなほめに構えた。左手が袂をおさえている。

「たとえ刀身は短くとも順手に構えるのが正しいのですが……」

直女の手の中でクルリと懐剣が半回転して順手に握られる。腕は伸ばして正眼の構え。

「よほどに慣れて胆も据わらねば、稽古ではともかく、いざというときには取り落とすやも知れませぬ。ゆえに、逆手に抜けばそのまま構えるをもって基本と為します。ただし、切先は必ず相手に向けるように」

道場の一面に端座する四人は小袖姿で立膝。教えを授ける直女も小袖だった。

「さらに。懐剣を抜くは、まさに女子おなごの一大事にかかわる場でありましょう」

直女の身体は、四人の右端に座っている少女に正対している。

少女は緊張した面持ちで直女の一言一句を受け止めている。他の三人は、次席師範代への敬意は保ちつつも、どこか寛いである。この三人が懐剣の心構えを拝聴するのは、これが初めてではなかった。

「ゆえに、刃物で相手を威そうなどと考えるはなりません。抜けば、即座に刺すべし！」  
直女は一步下がって懐剣を鞘に戻す。最初と同じ動作で懐剣を引き抜くや、斜め左に一歩踏み込んで腕を斜め上に伸ばし、目の高さまで振り下ろした。

「腕などに浅手を負わせても、かえって敵を激高させるかもしれません。身体ごとぶつかって腹を刺せば殺しかねません。右肩を刺せば、まず生き死にの沙汰にはなりません。構え直して助勢を呼ばわるか、一目散に逃げだすかは、機に臨んで変に応じなさい。常住坐臥、その場で危難に遭えば如何に処すかを考えるべきでありましょう」

太平の世が百年余も続き、武士といえども生涯刀を抜かぬ者も珍しくなかった。まして婦女子が懐剣で危地を切り抜ける場面など、およそあり得ることではない。それだけに、懐剣を携える心構えが大切なのだ——これは直女ひとりの覚悟ではない。幼時から父に叩き込まれてきた、懐剣術に限らずもつふ武術すべてにおける神髄である。

「身に寸鉄を帯びれば、すなわち武士。非力な女子、一尺足らずの小刀で何ができようと卑下してはなりません——野中殿」

道場の反対側で十五人の少年と若者に稽古をつけている、直女と同じく次席師範代の野中三次郎を呼ばわった。

「新弟子に懐剣術の型を披露しています。打ち太刀をお願いできましようか」

「応……」

里芋にも似た、黒ずんでこつこつした顔の男が、短く応えた。撓しな刀を壁の刀掛けに戻し、木刀を手を取った。

「皆も見えておきなさい。諸君が婦女子に刃を向けるなど、金輪際あつてはならぬことでは

あるが」

野中が道場の中央に歩み出る。直女も懐剣袋に相応の木刀を収めて野中と向かい合う。十九人の弟子が男女に分かれて壁際に座った。

双方、短く会釈して。野中は正眼の構え。直女は懐剣袋の紐をほどいて、そのまま身構えている。

「参る！」

野中がするすると歩み寄つて、不意に脇構えに変じるなり横殴りの打撃を浴びせる。峰は返している。ある意味、実戦的な攻撃であった。よほどの事情がなければ、いきなり女を斬り殺そうとする男はいない。刀で脅して、あるいは当身を喰らわせて、よからぬ振る舞いに及ぼうとする――のが、ありそうなことではなかるうか。

直女は身を翻して一尺ほど木刀筋をかわした。その気になれば一寸の見切りもできるが、武術の心得のない少女にもわかるように、わざと動作を大きくしたのだった。

「ぬん！」

悔りがたしと見て（という筋立てで）野中が木刀を持ち替え、袈裟斬りに打ち込む。

初めて直女が懐剣を抜いた。逆手の懐剣を腕に沿わせ、刀身で斬撃を受け流す。力と体格で勝る男の勢いに押されぬよう、左手を手首に添えていた。

カシイン！

剣勢をいなされて（わざと）たたらを踏む野中。直女は踏み込んで、その肩に懐剣を突き立てた。もちろん寸止め。大きく踏み込んだせいで裾が乱れて腿まで露わになっているが、羞じらう風情も見せず、そのままの姿で静止した。女子の一大事に瀕して戦うときに

羞恥など無用と、身をもって示している。

ひと呼吸の後、互いに後ろへ引き、直女は素早く裾を直した。刀を背中にまわして一礼。

「ありがとうございます」

「ひさしぶりに直女殿の懐剣捌きを拝見できました。ありがとうございます」

双方が元の稽古場所に戻った。

「小柄で身軽であれば、それに見合った体捌きがあります。牛若丸と弁慶との故事が、その良い例です」

今日が初稽古の少女は、頬を紅潮させ瞳に星を散らして直女を見上げている。

(また、付文などされるのかしら)

男女七歳にして席を同じうせず育てられた少女が年上の女性を慕う気持ち、同性としてわからぬでもないと理屈では納得できながら、しかし——七歳どころか十九歳の今日まで男に交じって剣鑽に励んできた直女には、やはり腑に落ちぬのだった。とはいえ、殿方を慕うという心情も、すくなくとも切迫した情動にまで燃え上がった経験はなかった。

午前の教授を終えると、直女は道場を下がって昼餉の支度にかかった。といっても、近在農家の娘が通ってきて早朝と夕方にほとんどの家事をしてくれるので、味噌汁を温めて香の物を切るくらいしか手間はかからない。それを膳に載せておひつとともに、道場主である父の居室に運び、飯は添えない膳を道場へ持つて行く。弁当を携えて朝昼の稽古に出ずっぱりの野中への心づくしだった。

井戸端で汗を拭いた野中が弁当を広げている横に膳を置いて、軽く会釈して立ち去る。

野中三次郎、二十七歳。百俵五人扶持の三男坊とあっては、ひとり口を養うのも苦しい。いずれは金山家に婿入りして、妙見流六代目当主におさまるものと目している弟子も多いが——問題はひとり娘である直女にあった。

「わたくしより弱い殿方の妻になるなど真つ平です」

十五で最初の縁談があったときに、直女は言つてのけたものである。相手は小商人の跡取りだったから、話はその場でおじゃん。

ならば——と、直女十七の歳に、印可を授けられた弟子が名乗りを上げたが、三本勝負をあればあれよという間に二本先取され、面目を失して道場を去っている。

では、野中三次郎であるが。模範試合では三対七くらいで分が悪い。素面素籠手であるから女の肌を傷をつけてはという気遣いもあるうし、師匠の娘とあれば遠慮もはたらく。実力では五分というのが、高弟たちの下馬評ではあった。

ちなみに、二人して次席師範代というのも——女に師範代を名乗らせるのはさすがに世間体もあれば、しかし野中に直女を圧倒する実力も無し。やむを得ぬ仕儀ではあった。

九つの鐘（正午）を聞いて、直女は稽古着に着替えた。湯文字は脱いで越中禪に替え、素肌に刺し子を着る。男と寸分たがわぬ出で立ちだった。鬚は崩して後ろで束ねている。

今日は十日。偶数の日は午前に初心者と婦女子への手ほどき、午後は志願する者の自由稽古である。撓刀を握つての地稽古（対等の攻め合い）を許された門人は四十名。そのうちの半数が参じていた。

道場を四つに（おおまかに）分けての地稽古が始まった。

直女は見所の近く右端に位置を占め、左側には野中が端座けんざしている。

「古田。今の片手打ち、刃が寝ています」

「茂木。小手先技で凄いはいけません」

「上岡。我から切先に飛び込むとは何事か。起こりを見逃したのであるう」

「田原。床を叩くとは、きちんと絞れていませんね」

叱咤する声の四つに三つまでは直女。総じて、直女は個々の技に、野中は稽古に臨む心構えに着目しているようだった。しかし高位の者が立ち会うようになると、二人の指摘も滅多に聞こえなくなり、ときおりの褒め言葉だけとなる。

八ツ半になると、野中と直女が道場に立つ。高位の者との地稽古。

妙見流では先代の頃から、対の稽古では木刀でなく撓刀を使っている。割った竹を細長い袋で包んだ袋竹刀の一種ではあるが、袋の口が真剣に似た形状をしている。だから、先ほどのように遠目でも刃筋を容易に見分けられる。実戦に近づける工夫であった。

最後は師範代次席を含む高位の者三名を名指ししての、当主との模範稽古。

稽古が終われば総出で道場の拭き掃除。庭に出て身体の清拭。禪一本になって濡れ手拭いで全身をこするのは、夏冬問わずの慣例となっている。

直女も平然と稽古着を脱いだ——のだが。

「大野木、見苦しい！」

直女が鋭く叱りつけて、斜め前に立っていた男の腹に濡れ手拭いを叩きつけた。

ビシヤツ……！

「あぐう……も、申し訳ありません」



男は、まだ大きく盛り上がったままの股間を両手で押さえて、内股になって悶えている。とはいえ、それほど堪えてもいないらしい。のっぺりした細長い、甘藷芋にも似た顔には、バツの悪そうな照れ隠しが浮かんでいる。

まわりの男たちは苦笑している。

妙見流道場の門を敲く者は年に二十人を超える。総勢七十名ほどの道場としては多いのだが、一年を越えて定着する者は、せいぜい四人に一人。つまりは、あらぬ期待を胸だか股座だかに秘めて入門したものの、今のような仕打ちを受けて早々に退散する不心得者が多いということである。いや、そのような目に逢いたいという、なおいつそうの不心得者もいるのかもしれないが、男としての面目もあればいつまでも同じことを繰り返すわけにもいかないだろう。

もつとも。まったく別の目論見で入門する者も少なくはない。

道場主の金山次郎右衛門は、三千石の旗本である金山太郎左衛門の弟である。兄は大名家への顔も利く。もしや仕官の口にありつけるかもしれないという、これも不心得者ではあるが。

いずれにしても、道場を経営する身としてはありがたい『鴨』ではあったろう。

だからといって、次郎右衛門が愛娘を『餌』にしていたわけではない。我が子だからといって別扱いは拙いと考えて、怖気づく幼い娘をむしろ叱咤して他の門人と交わらせていたのだが、胸が膨らみ初めてくると考えが変わった。やはり、女は女であろう。

しかし、正論を返されてしまったては、どうにも分が悪い。

「武道に男も女もありましょうか」

こうなると、娘に甘い父親としては、御伝馬娘おてんばを馭して（そして道場を継いで）くれる男の出現を望むしかないのだった。身から出た錆ではあったが。しかし悠長に構えているわけにもいかない。年が明ければ直女も二十歳。世間からは年増と陰口を叩かれる歳になる。

## 二 強辱夢想

次郎右衛門には、心当たりがあつた。というよりも、この男を措いて他には考えられない。

野中三次郎である。直女との比較はともかく。次郎右衛門にはすでに免許を認めている。あとは技ではなく心である。心気の熟成を見定めて口伝を授ければ皆伝——道場を継ぐにふさわしい男となるであろう。二十七歳。機は熟したと、次郎右衛門は見ている。

流派の継承に血筋はこだわらぬのが武芸の道。とはいえ、やはり免許に達し師範を務めるに足る実力を持つ直女をないがしろには出来ぬ。直女が三次郎の腕を認めて素直に婿に迎えれば画竜点睛ではあるのだが。

すでに三次郎の意向は確かめてあつた。部屋住まいもままならぬ身の上であれば、一城の主（道場主）になる話を断わるはずもない。しかも、男勝りとはいえ番茶どころか馥郁たる玉露であり、気性も直ぐな直女を憎からず思っている——などと、岳父になるであろう人に、悪びれずに答えさせしていた。

問題は直女の意向である。直女よりも強い武芸者など幾らでもいるが、そればかりが嫁入りの条件でもあるまい。小商人の倅などは話にならぬが、道場の後継者にふさわしい男との結縁に、親に逆らつてまで我意を貫き通すほど、我儘でもあるまい。しかし、出来るものなら納得めあわずくで娶めあわせてやりたい。

それは出来ると、次郎右衛門は考えている。我が子とはいえ、女心はわからない。しかし剣術の腕についてなら、当人よりもわかっているという自負がある。技だけで見れば、残念ながら直女に一日の長が無くもない。しかし、三次郎にはそれを押し拉ぐ心気の太さがある。本気の勝負なら直女は必ずや負ける――と、次郎右衛門は見ていた。

そして最後に。武家の娘であれば無視されても致し方のない女心は如何となると……

(まったく見苦しい……)

湯船に身体を沈めながら、直女は昼の出来事を思い返していた。直女の裸身に欲情した大野木。そのことを責める気は、直女にない。彼女とて、殿方の逞しい胸板とか引き締まった尻を目の当たりにすれば、相手によりけりではあるが……胸の奥が妖しく締めつけられることもある。腰の奥が熱く潤ってくることさえあった。そういうときは、湯文字と違つて出口を包んでくれる禰のありがたさを思わないでもない。

男のほうが不利だと、同情する気持ちもあつた。なにしろ、ひと目でわかつてしまうのだから。

直女が腹立たしく思うのは、大野木の股間の反応についてではない。それなりに本気で打ち込んだとはいえ、濡れ手拭いである。風をはらんで勢いを殺がれ、大きく撓つてもい

る。それをかわせなかつた油断、不覚悟を憤っていた。しかも、打たれてなお勃起させているとは。

あの一撃をかわし、即座に劣情を捨てて平常に戻り、それから謝るのが剣士として男子として当然ではないか。

それとも。あのように逃げ損ねるのではなく、堂々と打擲を受けて、痛みに悶えることもなく傲然としていたなら……それも男らしさというものであろう。

いや、あのように大勢の居合わせる場ではなく、二人きりであつたとしたら。直女も、まったく動揺していなかつたわけではない。そこにつけ込んで……組み合わせ、直女に勝機はない。押し倒されて……このように……

いつか直女は、乳房をおのれの手でわしづかみにして、こねくつていた。二年ほど前までは、このように乱暴な真似をすれば痛みが先に立っていたのだが。

乳首が、痛いほどに隆起してくる。そこも指でつまんで——さすがに、そおつと転がす。

「あ……はああ」

感極まつた吐息を漏らした。

直女は、もちろん男を知らない。しかし、男ばかりの門人にまじって剣術を修めてきたのであれば当然に、世間一般の娘には知りようもない話までも耳にはいつてくる。男の生理も然り、女をどのように扱えばどのようなことになるかといった事柄も（男の偏見を通してではあるが）然りである。

だから、うら若き乙女の肌を見て勃起が生じるのは当然のことともわきままえている。自分に対してそれが生じることに、生娘ゆえの羞恥は感じるにしても、女としての誇らしさ

も禁じ得ないでいる。もちろん——それはそれ、武道は武道。だからこそ、「身に寸鉄を帯びれば、すなわち武士」などという、聞く者によっては驕慢とも思える言辞に及ぶわけでもあるが。それはともかく。

女の股座の割れ目の頂点にある小さな豆のことも、いつしか聞き及び、また自身の手で確かめてもいた。直女の右手が湯船に沈んで、その豆を探り当てた。

「あ、ああああ……」

吐息が、いつそうなまめかしくなる。

直女の想像の中で、彼女を押し倒した男は女の敏感な部分を執拗に弄び廻り……やがて、のしかかってくる。抗おうとしても、自分の目方の倍ほどもある男に押しつぶされ、懸命に閉じ合わせようとする腿を雑作もなくこじ開けられて……

それまでぼんやりと霞んでいた男の顔が、不意に鮮明になった。それは甘藷芋ではなく——里芋にも似て、ごつごつしていた。

(のな……)

顔の持ち主の名前が頭に浮かびかけて、あわてて直女は右手を股間から引いた。

——つまりは、それが直女の女心だったのである。